井戸端相談の支援としての、子育てサークル出前企画の試み

○NPO 法人はんもっく　福井聖子（00432）

[キーワード]井戸端相談、子育てサークル、共助

1. 研究目的

子どもは成長過程で年齢特有の行動や問題があり、子育てでは日常的に生じる些細な出来事や問題を共有できる親同士の井戸端会議的つながりが身近な支援として重要である。しかし近年、働く母親が増え、また子育て支援センターや集いのひろばなど在宅乳幼児の子育て支援体制が整ってきた中で、親同士自分たちでつながりを作る必要性が薄らいできた印象がある。また、思春期からすでに SNS に囲まれて育った若い親世代では、知らない人同士が対面で会話を行うことに不慣れで、乳幼児の親子の集いがあっても、つながりを作れないという声も聞かれるようになった。親同士の共助体制を構築するには、行政や専門職主導よりも民間の仲間意識を活用する方が実現しやすく、われわれは NPO 法人としてその方法を模索してきた。 本研究は、地域における共助型子育て支援の実践とその効果を検討するために行った。

2. 研究の視点および方法

幼児の母親同士が自主運営する子育てサークルは、世話役や狭い範囲の人間関係に負担感を感じる人も多く、衰退傾向をたどってきた。しかしわれわれは、2012 年の第 13 回全国大会にて、子育てサークル参加の保護者がひろば型支援参加の保護者と比べて「ママ友ができる」「しんどい気持ちを分かってもらえる」比率がやや高いことを報告した。また母親同士のゆるやかなつながりを作る地域おやこクラブとその仕掛け人養成について言及した。

その後、地域おやこクラブは回数を重ね、参加者の中から子育てサークルの担い手や当団体の仕掛け人に加わる母親も数名現れた。一昨年前より地域おやこクラブで培ったプログラムを、子育てサークルの拠点に出向いて展開する出前企画を行ったところ、非常に好評でサークル活動継続にも役立つとの声が聞かれるようになった。その他のサークル支援も行っている状況であるが、市内の子育てサークル数はやや増加に転じ、存続の危機を訴える声は減少した。

今回の研究では、出前企画が子育てサークルという母親同士のグループ活動や井戸端相談といった共助的関係性にどのような影響を及ぼすのか、実践内容とアンケート結果の検討を試みた。

期間は、平成 26 年 6 月 1 日～平成 27 年 5 月 31 日に依頼を受けた 9 サークル 19 回の出前企画について検討した。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づき、収集したデータについては統計的に処理を行い、結果の公表に際して施設や個人が特定されることのないよう十分配慮した。

4. 研究結果

出前企画は、地域おやこクラブで行っているプログラムが主である、オープニングのダンスと手遊び・親子触れ合い遊び・親同士の自己紹介ゲーム・紙芝居・日替わりメインメニュー・子どもはおもちゃ、大人はお茶タイム・終わりの挨拶などで、サークル独自の開始や終わりの儀式がある場合は適宜組み合わせて行う。サークルの年会費は2000円で初回出前は1回無料、次からは1回1サークル1500円の費用を徴収している。

サークルAからは毎月のように依頼があり、「この企画があるから、運営していける」との声を聞いている。当初は内容の充実に気配りしたが、大人同士の話し合いの時間に感謝の言葉が多く聞かれたため、内容は短時間切り替えとして最後の時間に余裕を持たせるようにした。

出前企画終了時のアンケートは、9サークル12回分129名（1回平均10.8組）の結果が得られ、『とても楽しかった』93%、『まあまあ楽しかった』6%、で、今後のサークル活動に対して『すごく良い影響がある』78%、『少し良い影響がある』18%、『どちらともいえない』3%、であった。活動に良い点としては『活動の充実』59%、『メンバー同士ゆっくり話せる』50%、『気分転換になる』29%、『活動の参考になる』26%、『負担が減る』24%、『同じ立場で楽しめる』22%であった。

活動のメインメニューは、おやつクッキング・季節の行事・工作/遊び・講座などの分野に分かれるが、季節の行事や講座では『同じ立場で楽しめる』、工作/遊びでは『活動の参考になる』『ゆっくり話せる』、クッキングでは『活動の充実』などが多く、親子一緒の楽しみ方や親同士話せる時間と機会の設定などで、結果に違いが認められた。

5. 考察

子育てサークルに関する調査結果では、負担感の主な要因として、活動内容に困る・メンバー同士で活動量に差がある・役員の負担が大きいなどが挙げられている。また、幼稚園入園の低年齢化などにより参加者が入れ替わりやすく、サークル内でも話をしないメンバーがいる・人間関係に気を使うといった点も指摘されてきた。

この出前企画は、サークルOBや現役乳幼児の母親が数名で活動内容とおもちゃを持参し、日頃の活動拠点に赴く形を取るため、サークルの子どもたちは慣れた場所と日頃接するママと友だちで一緒に楽しむことができる。子どもがよく遊ぶ傍らで、母親同士がゆっくり話のできる環境は互いの関係性に余裕が生まれ、かつて親同士が集まると語り合っていた子育ての些細な悩みや先輩のアドバイスなどがお互いの中で生まれている。

井戸端相談では、同じような立場で気持ちを尊重しながらお互いの知恵を出し合うが、基本的に対等の関係性が保たれないと一部の親だけが追い込まれる形となる危険性がある。今まで経験はないが、お茶タイムでこのような危険性が出てきた場合は、仕掛け人が『しんどいことを出せ、価値観の多様化を受け止める』雰囲気を作ることが必要であり、ファシリテーションの技術について今後検討していきたい。